

品種で差別化図れ

加工・業務用に向く品種など続々

東京ビッグサイトで「施設園芸・植物工場展2018」(主催=日本施設園芸協会)が3日間にわたり開催された。施設本体・資材から環境制御装置、省力化サポート機器など、最新・最先端の機器や技術が一堂に会した。とはいっても、肝心なのは「何を栽培するか」。展示会では加工や業務用にも適した品種や食味を重視した品種などが揃い、差別化や付加価値アップが期待できると生産者のみならず流通業者の関心を集めた。

サカタのタネは、イボなしキュウリ「SK4-109」、トマト「麗妃」などをPR。SK4-109は表面がなめらかなため洗浄しやすく、雜菌が残りにくい。同社では、イボなしキュウリ「フリーダム」を開発し

イボなしの「SK4-109」(上)、福井シードは「シアースパラガス」の水耕栽培を提案

9は果長21cm前後で収穫が可能。さらに、施設内でCO₂を施用することで収穫量もアップする。

「食味も良く、(加工場で)扱いやすい。カット

野菜やサンドイッチの材料として導入されることでキュウリの消費拡大につながれば(野菜統括部の伊藤昭平氏)と期待する。

トマトでは夏秋栽培に

向いた「りんか409」が環境制御型施設で導入されているが、冬春向けに「麗妃」をアピール。収量性、秀品率が高いうえ、黄化葉巻病への耐病性も備える。

高田種苗は、オランダで開発された果菜類やレタス類を中心紹介。とにかく、フリルレタス「ラリックRZ」をいち押し。

会社ライク・ズワーン社が開発した品種で、日本国内で流通するフリルレタスと比べて株姿がコンパクトで、徒長、軸伸び、ねじれなどの問題がほとんど発生しないといふ。

パクトで、徒長、軸伸び、力ネコ種苗は施設園芸、植物工場の総合提案

として、果菜類、葉菜類などの養液栽培システムやトマト、エタマメ、レタスなどの品種を紹介。

トマトではレモンイエロ

ーの果実でフルーツ感覚で食べられるミニの「イエローミニ」など、レタスでは株元をフンカットして開発したトマト品種や、「シアースパラガス」など味の良さにこだわった開発したトマト品種が注目を集めた。シアースパラガスは塩湿地に自生し、「アッケシソウ」とも呼ばれる。ミネラルやビタミン、食物繊維を含み、ヨーロッパでは野菜として食されている。塩味があるため、サラダの材料にも向く。同社で

は、周年での栽培技術を開発。さらに自社で増殖、採種を行うことで、安定して苗を供給できるようになつた。

力ネコ種苗は施設園芸、植物工場の総合提案として、果菜類、葉菜類などの養液栽培システムやトマト、エタマメ、レタスなどの品種を紹介。

トマトではレモンイエローの果実でフルーツ感覚で食べられるミニの「イエローミニ」など、レタスでは株元をフンカットするだけで葉がばらばらになる「マルチリーフエアリ」などをPRした。

トキタ種苗では、イタリア野菜の「グストイタリア」シリーズを中心に紹介。中でも「カリーノケール」は苦味やエグミが少なく、サラダにも向く。水耕栽培も可能だ。

シリーズ以外では、皮が白く、加熱すると果肉が濃厚な甘みのミニトマト「フラガール」なども来場者の関心を集めめた。

シリーズ以外では、皮が濃厚な甘みのミニトマト「フラガール」なども来場者の関心を集めめた。